



鬼齒

姉が頬を押さえながら帰ってきた。

「抜いたの」

姉はてのひらに持っていたものを見せてくれた。

小さな、とがった歯。

もう中学生になって久しいというのに、姉の右上の乳歯はいつまでも生え変わろうとせず、抜いてもらうことになったのだという。

わざわざ抜かなくて、いつか抜けるわ。

そう言って姉は嫌がったが、結局は歯医者に連れて行かれてしまった。

「痛かった？」

「別に」

姉は少し前まで自分の一部だった歯をじっと眺めていたが、

「でも、こいつ、いやだいやだってメリメリ泣いたの。絶対離れないってあたしを引っ張るのよ。それが嫌だった。わかる？」

よくわからないので首を横に振ると、姉はあきれたようにため息をついた。

「どうでもいいわ。もう抜かれたんだもの。……とりあえず、この歯、植えといて」

ぼくはペットボトルで適当にポットを作ると、そこに姉の歯を埋めた。

しばらくして芽が出た。

ほどなく葉が出て茎が伸び、ひとつ大きなつぼみをつけた。

そして、ぼくのてのひらぐらいの大きな花が咲いた。

はじめその花は、何色もの原色絵の具を別々の方向から気ままにスプレーしたような、おかしい斑模様だった。そのいくつかは混じり合い、いくつかは完璧に独立した円を作っていた。

総合すると、とても奇妙な花だった。

しばらくして花はしぼんだが、そのしぼんだ夜遅くになってまた開いた。

今度は前の色をどこで振り捨ててきたのか、深い紫がかった上等の赤い花が咲いた。

深紅の花びらが開ききると、朝が来るまでにはらはら散ってしまった。

姉の歯はまた生えてきた。

生まれかわって、自分を抜いた奴、抜かせた奴に復讐してやる、とあの乳歯は思ったのだろうか。

そう考えさせるほど、姉がときおり見せる笑顔の下からこぼれる八重歯は、美しくとがっていた。